ウェアラブル咀嚼回数測定装置を利用した咀嚼指導方法の開発

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八木, 孝和, 浅枝, 麻夢可, 水村, (小林) 容子, 氏橋, 貴子, 西保, (川野) 亜希 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-tokiwa.repo.nii.ac.jp/records/1191

2-P-14

ウェアラブル咀嚼回数測定装置を利用した咀嚼指導方法の開発

八木 孝和[1)]
浅枝 麻夢可[2)] 水村（小林） 容子[1)] 氏橋 貴子[2)] 西保（川野） 亜希[1)]

【目的】口腔機能の管理は、全身の健康維持において重要なファクターであると言われている。しかし、日常生活での咀嚼行動は十分に検証されていない。
本研究では、ウェアラブル咀嚼回数計測器とスマートフォンアプリを利用した、日常生活の咀嚼機能管理、およびリアルタイムな被験者へのフィードバックは、咀嚼機能および認知機能に影響するのか検証することを目的とし、自己管理の有無による比較検討を行った。
【方法】咀嚼に対する自己管理群（実験群）と、非自己管理群（対照群）にランダムに分け、実験群は初回検査から 1 週間後検査の間に 3 日間、自宅で 1 日 3 食の咀嚼行動を記録した。初回・1 週間後検査では、100 g の米飯を用いた咀嚼行動の記録、咀嚼ガムおよびグミゼリーを用いた咀嚼能力の測定、さらに、認知機能の検査を百ます計算を用いて行った。
【結果】実験群 14 名（19.0±0.7 歳）、対照群 10 名（19.3±1.3 歳）に行った結果、100 g 米飯による咀嚼回数は、実験群で有意に増加した。一方で、咀嚼能力、百ます計算は、実験群と対照群で同様の結果となった。
【考察】ウェアラブル端末とアプリを用いた自己管理が、咀嚼回数に影響を与える可能性が考えられた。一方、認知機能においては個々の計算スキルなど他の要素についても考慮しなければならず、方法の改善が必要である。今後、被験者数を増やし、調査期間を延長するなど、更に検証していく必要がある。

1）保健科学部口腔保健学科　2）神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科